



# その想い



第16号

発行人：谷泰智  
3年7月15日発行

## ★ 富嶽両界峯入 9月30日から10月5日まで

上記の日程で今年も富士山へ修行に行って参ります。昨年は全ての山小屋の営業が停止され、五合目より上も事実上封鎖の状況でしたので、村山古道の前半から時計回りに富士山の裾野を回り、道中滝行も挟みながら樹海を抜ける修行となりました。

オリンピックを控え、その後の状況も未知数ではあります、今のところ今年は封鎖が解かれるようですが、この度は例年通りに海から3776mの頂上に登拝できそうな見込みです。

前々からお伝えしている通り、大和修験會は護国寺の総本山である聖護院門跡に所属する団体であり、同じ聖護院末寺として私の大先輩に当たる宮元隆誠師が代表を務めています。宮元師の「末寺から本山を盛り上げたい」という想いに共鳴した私が加わって早や5年、今年が通算11回目の富士山修行となります。毎年新たな気づきを学ばせていただき、また有難い事に年を重ねる毎に檀信徒皆様から頂く祈願・回向のお申し込みは増えております。

多くの方々に支えられ、想いを託され、決して自分一人の身体ではないのだと言い聞かせながらの山修行。そこには感謝に堪えない気持ちはもちろんのですが、正直に申し上げると「己の力を確かめたい」という気概のようなものが常に胸の奥底から湧き出ています。その気概は、ともすれば自己満足と背中合わせのように思われますが、私はこの事に関しては、既に富士山の赤い礫を何万回と踏みしめる中で不惑の思いに至りました。

現在、日本の各伝統宗派が以前よりもより社会に歩み寄ろうとして、様々な革新やはたまた原点回帰に取り組んでいる中、修験道の本分である山岳での頭陀行は仏教の根本精神に大いに適うものであり、また体性感覚を忘れがちな現代に於いては心身の健康を保つのに大変有効で貴重な体験になるはずです。参加を希望される方が居られましたら護国寺にお電話ください。また今年も別紙にて特別祈願・回向のお申込みを受け付けております。富士山麓の興法寺大日堂ならびに富士山頂にて心より御祈念させていただきますので、こちらもご希望の方は是非お申込みください。

## ★ 佐川町長寿大学で講演させていただきました

少し前の事になるのですが、去る3月18日に佐川町社会福祉協議会からのご依頼を受けて、健康福祉センターかわせみにて90分間の講演をさせていただきました。『活かせる仏教』という演題で国内の伝統仏教諸派に共通する四諦・八正道・六波羅蜜という基本的な仏教学を日常生活でのいろんな場面に関連付けて比較的平易にお話させていただきました。

仏教には大きく二つの側面があり、一つはお釈迦様を始めとする諸仏諸菩薩への信仰という宗教としての側面。そしてもう一つはお釈迦様の解かれた法という教えを学び、地に足を付けた生活の中で実践する、宗教ではない側面。今回は後者の話であり、実際後者の話の方が万人受けするのですが、今後は自身の経験や学びを踏まえながら、少しずつ信仰の世界もお伝えしていくと考えています。



# ★石材店さんに聞く



越知町横倉山の麓から3年前に加茂の地へ移転された、  
横倉石材の岡林増樹社長にお話を聞いてきました。

今回は供養の話とお墓の話を一つにまとめて2ページでお伝えします。

近年、都市部では葬儀を営まずに直接火葬場で遺体を荼毘に付す直葬の割合が、火葬全体の25%にまでおよぶというデータがでています。それに伴って、お墓を「ただお金がかかるだけの形式に過ぎない」とまで割り切ってしまう方も増えてきています。

少子化や経済的な背景に裏打ちされて、弔いの多様化は認められて当然なのですが、中には薄利多売に弔いを切り売りするかのような安直な風潮があることも事実です。この機会に今一度お墓について考え、弔いの選択肢をさらに豊かなものにしていただければ幸いです。

『ポツンと一軒家』というテレビ番組が好きで、そこに登場する家族の皆さん是一体どんなお祀りをされてるんやろう？っていつも考えるがです。素朴でささやかだとしても、ご先祖様に対してないがしろにせず、きっと温かい気持ちで接してるとんじやないだろうかって思うがです。現在は散骨などの簡素化が進んでいますが、お弔いは合理化とはまた別の違うものじゃないでしょうか？

そもそも、『埋葬』そのものの歴史は、ネアンデルタール人まで遡ると言われてるんですが、彼らは近親者を埋葬する時に、すぐ近くのお花では無くて8kmぐらい離れた所のいろんな種類のお花を死者の傍らに供えたそうなんです。それはつまり死者を大切なとして敬っていたということで、なぜ大切にしたかというと、そこには原始の物々交換が根底にあって、死者を黄泉の世界に丁重に送ることで、その交換として彼らのもとには新しい命がまた生まれると考えられていた。当時の人々にとって一番嬉しい出来事は新しい人間の生命が誕生することで、言い換えれば、彼らの心の中では生と死が同じ環で繋がっていたがやないろうかと思います。

現代は便利になった反面、死を間近にする機会が減ってきたと思うんですが、やっぱり死を意識することが生をより豊かにすることにもなると思うがです。前向きに死を意識するのは、やっぱり供養の気持ちだと思います。そして、その気持ちが向かう対象が、日常の営みの中で何かと波風の立つ自分の心の外側に確固として、いつも変わらず在って安心を与えてくれるもの、それがお墓じゃないかなと思うがです。

今の日本人に馴染み深い一般的なお墓の形式は、卒塔婆の語源でもあるインドのストゥーパに由来するそうです。積み上げられた墓石の一番上の石を竿石サオイシと呼びますが、これがもともとはお骨の代用だったそうです。一度納骨してしまえばお骨を見ることができなかつたので、竿石をお骨に見立てて拝み、また屋内では木の位牌を同じく遺骨の代わりとして拝んだそうです。

その風習が仏教と共に日本にも伝わり、やがて民俗学者の柳田國男氏の言う「人はなくなったら33年～50年かけて自分の個性を捨てて氏神になる。」という考え方が各地で広まつていったようですね。神道の考え方の荒魂アラミタマとして死者を恐れる側面もあったようですが、一方では死者を毛嫌いせず集落内の生活の場に墓地を設けていた三内丸山遺跡のような例もあるようですね。（石材の話に続く／＼）



ご自身が手ノミで彫られた庵治石の古代五輪塔



越知町での時代を支えた44インチのダイヤモンドカッター



段階を変えて使うたくさんの研磨版



石の角のみならず、己の  
神経も研ぎ澄ます作業。

石屋の世界は分業ながです。採石場で石を採掘する人に始まり、役物・仏像彫刻・灯籠・墓石などの用途によって分かれて、さらにそこから磨きや刻みや字堀りの職人さん（石工）の手によって仕上げられていきます。

お墓の石材としては、青石という砂岩が使われることもありますが、花崗岩・安山岩・玄武岩などの火成岩が耐久性の面から圧倒的に多いですね。特に花崗岩に分類される庵治石カコウガアシイシが、硬度や色目の風合いでは世界でもナンバーワンの墓石で、私が特に思い入れのある石ながです。

庵治石は香川県高松市の瀬戸内海に突き出た牟礼町と庵治町だけで採れる石で、他の花崗岩に比べて石英・長石・雲母などの結晶が小さいのが特徴で磨くほどに青黒い艶を帶びてきます。けれども自然にある状態では傷や錆が多く、墓石として使われるのは現地で採掘される総量のたった4%にしか満たない、大変稀少な石ながです。

庵治石だけではないですが、現地から調達した稀少な石材に細心の注意を払いながら作業は始まります。先ずは何カ所にも楔を打ち込んで割の作業からになります。そして石を規定の寸法に切断していく作業になりますが、これには丸鋸のようなダイヤモンドカッターを使います。触ってもらってわかる通り、回転する刃先はそこまで尖ってなくて、切ると言うよりも叩き削っていくような感じです。

無事に切断し終えても、ここからの磨きの作業が更に大変ながです。実は、切断の時の寸法はこの後磨きをかけてさらに縮んでいくことを予め計算に入れてやっています。つまり一回だけジャーと磨いて終わりじゃなくて、ここから6段階以上研磨版を変えて1段階ずつ丁寧に磨いていきます。砥石の目が細かくなるにつれて、前の段階の跡を確実に消しながら進まないと、深みのある磨き艶がでません。また、熱を持たないように切断と研磨の作業中は常に水を流しながら粉塵を吸い込まないように作業してますが、昔は機械が無かったので、石工さんの中には肺をやられて亡くなる人が多かったそうですね。

次に字堀に写りますが、これは機械任せではなく、職人が圧縮したエアーで彫り込む道具を持って行なっています。とくに破片が飛散しやすい作業になるので、大きな箱の中に石材を固定して、職人は外から厚手の手袋を嵌めた手を入れてマスクを着け、粉塵が付いてすぐ視界が悪くなる小さな窓を除きながら神経を尖らせての作業になります。これまで護国寺さんの檀家様からお預かりした墓誌版もこのような作業で彫り込ませていただきました。こうして仕上がった石材を墓所まで運搬し、最後は設置の作業となり、その後各菩提寺のお坊さんから開眼供養をしていただいて、石は石材から『手を合わす対象としてのお墓』になるがです。

最後に当社のホームページにも書いていることながですが、私はこれからも、ご先祖様や亡くなった人を大切にする事は、とても「大事」なことと伝えていきたいと願っております。その大事に敬う気持ちさえ伝われば「こころの豊かさを廻向してもらえる」と信じております。葬送にかかる従事者として、「本質」を伝えていければと想います。



伝統的な石塔だけでなく、個性的な  
自然石のお墓も多数手がけられています。



大きなモニターに  
過去のいろんな施  
工例を示しなが  
ら、丁寧に説明し  
て下さいます。

横倉石材  
いしを なごむ  
TEL : 0120-140-756  
佐川町加茂3338-2  
(国道33号線沿い)  
<定休日> 日曜日  
★ホームページも充実  
しています！



# お経のことば



年老いるまで戒は楽しく 信が確立することは楽しい

智慧を得ることは楽しく 諸悪をなさないことは楽しい

ダンマパダ (法句經) 象の章 333偈 訳: 片山一良

本来、人が生きていく上での不安は必要悪と言えるもので、原始時代に至っても現代に至っても、我々は自然の脅威や他者からの暴力などを不安と見なすことで、備えやコミュニケーションを発達させて環境に適応して生きてきました。しかし、近頃の世相を見ていると、どうも我々は『不安』というものに対しての向き合い方が昔に比べて上手くいっていないような気がします。

そんな不安と少しでも上手く向き合う為のヒントとなれるよう、今回のお経はお釈迦様の肉声に近い原始経典の中から法句經 象の章の一節を選びました。四つの文節から構成されていますが、二つずつの対句として捉えてみると味わい深いものがあります。

注目すべきは四つの文節に共通する『楽しく』と『楽しい』という言葉です。仏教に於ける楽しいとは身勝手な享樂の意味ではなく、充実した心の豊かな状態の楽しさを表します。

一つ目の文節から順に見ていきます。「年老いるまで」の「まで」は「迄んでもなお」という意味に解釈するのが適切なようで、「戒」は以前にもお伝えした通り無目的に強制されたものではなく、自発的な戒めであり、目的や目標に向かっての戒めです。それを踏まえて言葉を足せば「年老いても目標をもって何かに励むことは豊かな生き方である」と前向きに解すことができます。さらに、ここで意味を切ってしまはずに続けて読むと、その豊かな生き方の継続が次の文節に登場する「信が確立すること」に繋がります。

お釈迦様が仰る『信』とは何らかの情報を鵜呑みにすることでもなければ、コロナ禍の中で気受けよく多用されるエビデンス（科学的根拠）に裏打ちされたものでもないのです。もっと言えば、『信じる』という動詞として捉えるのではなく、『信』という形に現わせないものを自己の中で直向きに育てていき、やがてはそれを確立することが大事なのであって、ましてやそれを他人に強いることなど不可能なのです。

続く三番目の文節も同じように四番目にかかっています。『智慧』とは仏教の叡智のことですが、万人の日常生活に於いてそれを活用した生き方という意味で解りやすく言えば『優しさ』に置き換えることができます。ですから、智慧を得ていくに従って優しさはどんどん深みを増し、その結果、自ずと諸悪をなさないことに繋がっていくのです。

頓悟頓入という仏語に表されるように、悟った瞬間に万事がOKという理想を我々は抱きがちです。はたまた神秘体験や格言めいた言葉の持つ一瞬の醉いに求道者は浸りがちです。お釈迦様は35歳で悟りを開かれ一切の迷いから出離されたわけですが、そこでお釈迦様の人生がふたりと終わったのではなく、以後45年間をあらゆる人々との対話と説法に向けられました。頓悟あってこそ45年間と見るべきなのかもしれません、私はむしろその45年間を貫いたものに重要な意味が込められていると見ています。それは単調とも言える日々の精進の継続です。

原始経典に書かれている通り、悟りを開かれた以後もお釈迦様にとって戦争による祖国の滅亡や、弟子の不始末、さらにはご自身の老いなど、客観的に観れば不安は必ず付きまとっていたはずです。しかし、それであってもなお楽しく生きることができるのだということを身を以て体現されたのがお釈迦様の教えであり、それを表明されたのが今回のお経の言葉です。



### 行事案内

詳細はまだですが、令和3年  
は久しぶりに本堂でコンサー  
トを開きたいと思ってます！

毎月28日の9時と3時から  
本堂にて柱源護摩供養

本山修験宗 大瀧山護国寺  
781-2155  
高知県高岡郡日高村九頭291  
電話 0889-24-7244

ホームページ  
[gokokuji.site](http://gokokuji.site)


